

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

第 130 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成14年12月21日

エリマキシギ



2002. 9. 1 能取湖 撮影者 片山 實

〒007-0870 札幌市東区伏古10条2丁目15-10



も く じ

私の探鳥地 (44) 『王子ワッカナイ水源池』

成澤 里美	2
石狩川下流の小形舟艇による水上からの鳥類調査	
石川 信夫	3
北大構内の野鳥四季	
山田 雅仁	8
北海道における繁殖期のコムクドリの分布	
藤巻 裕蔵	11
長万部でツクシガモを観察	
新城 久	12
フルマカモメは冷凍サンマがお好き	
島田 芳郎	13
探鳥会ほうこく	13
藤巻裕蔵氏から	15
探鳥会あんない	16
鳥民だより	16

私の探鳥地 (44) 『王子ワッカナイ水源池』

成澤 里美

私が、ワッカナイ水源池に鳥見に行くのは、晩秋から早春にかけて、シーズンに2〜3回くらいです。水鳥をじっくりと観察するにはいい所だと思います。経路は次の通りです。苫小牧市双葉三条通りを室蘭方面に進み、進路左側の王子製紙貯木場がとぎれる頃、清水橋をわたってすぐの信号を右折します。ここから4kmほどです。苫小牧川を渡ってすぐ、ゲートがありますが、午前7時から午後5時までは施錠していないので、開けて通ることができます。未舗装の原野の道を進み、道なりの突き当たりで到着です。

駐車場辺りでは、イチイの木でヤマガラ・シジウカラなどのカラ類が迎えてくれます。シマエナガの群れやオオタカに会ったこともあります。左手には水門から流下した川が流れ、火山灰の川床を見せながら雑木林の谷に入っていきます。

管理事務所に一言ご挨拶し、構内を進むと、ちょっとした広場になっており、ヤチダモやミズナラなどの木々が茂っています。カラ類やキツキ類など森林性の鳥が見られ、ホオジロ・ツグミ・シメ・イカル、時にはミヤマホオジロが現れることもあります。

水源池は、一望で見渡すことができる小さな人造湖です。道が湖岸にそって真っ直ぐに続いているので、道端のどの部分からでも観察できます。湖面には水鳥たちが思い思いに浮かんでいますが、手前の方には、ホオジロガモ・キンクロハジロ・カワアイサ・ホシハジロ・カイツブリなど、中程から奥の方にはヨシガモ・ヒドリガモ・オナガガモなどがあることが多く、オカヨシガモを見ることもあります。一番多いのはマガモ・コガモで岸の近くに寄っています。平成10年11月には、口元に小さな白い模様のあるトモエガモの雌タイプを見つけました。目の後ろの緑色のヒドリガモやアメリカヒドリとの交雑らしいヒドリも見かけました。時々アメリカヒドリが混じていました。

近年、湖底の浚渫を行ったとかで、水鳥の数が減ってい

るようですが、平成13年1月にはコガモの群れの中にアメリカコガモが混じっていて、なかなかあなどれない場所だなあと感じました。ここではセグロセキレイが繁殖していると思われます。

行き帰りの原野の道でも、ツグミ・ベニマシコが車の前をかすめ、コウライキジが顔を見せたこともあります。電柱にノスリ、上空に尾端の黒帯が目立つケアシノスリの白っぽい姿を見ることもあります。

今までに出現種数、48種を数えています。

〒002-8001 札幌市北区太平1条1丁目1-1-701



石狩川下流の小形舟艇による水上からの鳥類調査

日本野鳥の会旭川支部長 石川 信夫

はじめに

河川水辺の鳥類、特に水上や河岸・湖岸部に分布する鳥類の生息状況を正確に把握するためには、陸上からの調査だけでは不十分で、ボート・カヌー等小形舟艇を使用した水上からの調査を併用することが不可欠であると考えている。

その趣意から、ここ数年に亘ってサロベツ川、豊平川下流、天塩川上流、天塩川下流、及び石狩川下流について、ボート、カヌー等を使用した鳥類調査を実施する機会を得た。

ここに、これら調査のうち、平成13年6月に実施した石狩川下流の調査結果について、その概要を報告し所見を述べる。

調査に当たってご協力頂いた関係各位に厚くお礼申し上げる次第である。

I. 調査区域及び調査日 (図-1 参照)

- ① 神納橋～砂川遊水池 (KP. 137～KP. 85)

6月23日(土) 晴
- ② 砂川遊水池～千歳川合流点付近 (KP. 85～KP. 28)

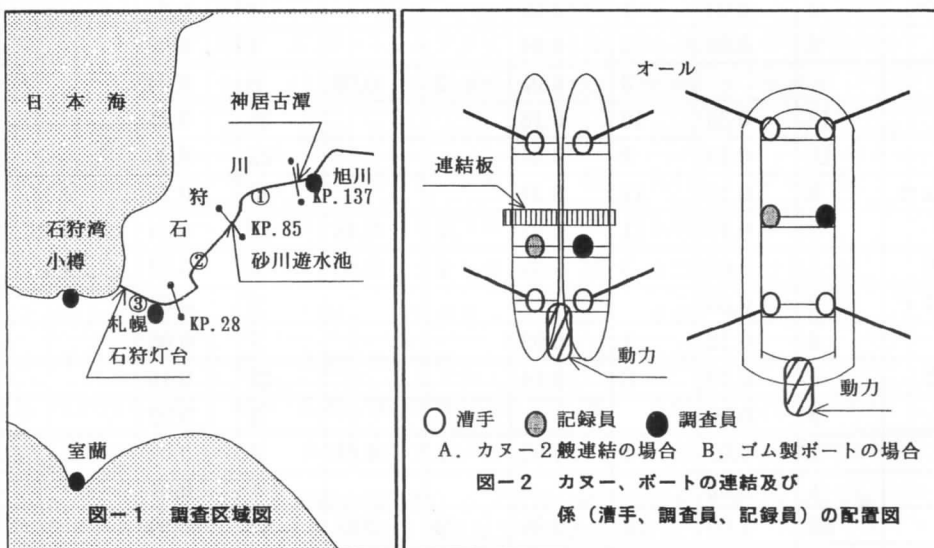
6月24日(日) 曇
- ③ 千歳川合流点付近～石狩灯台付近 (KP. 28～KP. 2)

6月25日(月) 晴

II. 調査方法及び留意点について (図-2、A、B参照)

- (1) 調査は上流より下流に向かって川を下りながら行った。

- (2) 河川水辺を主たる生息・繁殖の場とする鳥類を重視して調査を実施した。
- (3) 6月23日の神納橋～砂川遊水池の調査、及び24日の砂川遊水池～千歳川合流点付近の調査ではカヌーを使用し、手漕ぎを主に、必要な場合には動力を併用した。
- (4) 25日の千歳川合流点付近～石狩灯台付近の調査では、川幅が広いいため左右両岸に移動が必要な場合に備え、動力付きのゴム・ボートを用いた。
- (5) カヌーを使用する場合は2艘を並列に連結して安定をはかり、双眼鏡等による鳥類の確認作業を容易に行えるよう工夫した。
- (6) 図-2 (A、B) に示すように調査員と記録員及び漕手を配置した。
- (7) 危急の場合に備えて、他に2艘のカヌー及びボートが伴走するようにした。
- (8) 調査は両岸の植生や河岸の環境等を判断して、左岸、右岸を適宜選択移動しながら、水面、上空、中州、河岸、及び水辺に近い河畔林の林縁部や草地に生息する鳥類を調査対象とした。
- (9) 調査は双眼鏡 (ZEISS, Dialyt 7×42B) による目視及び鳴声 (囀り、地鳴、警戒声) 等により、生息する鳥類の種名及び個体数、生息環境、繁殖状況等を記録した。
- (10) 特に必要の場合に備えフィールドスコープ (望遠鏡) を携帯した。
- (11) 河岸の崖地については、カワセミ類の営巣及びショウドウツバメのコロニー (集団営巣地) の有無及び集団の個体数や巣穴の数等の測定に徹底を期した。
- (12) 川に架かる橋梁や構造物を通過する際にはイワツバメの集団営巣の有無、及び橋の上流、下流の飛翔範囲や個体数に留意して調査した。
- (13) 調査員の使用する双眼鏡等の器具や記録員の使用する筆記用具、カメラ、その他の携帯品は (前回の調査で水を被った経験から)、被っても濡れないよう工夫した。



Ⅲ. 調査結果 (表-1 参照)

表-1 記録鳥類一覧表

No.	科 目	調査区間 種 名	① 52km		② 57km		③ 26km		合計 135km		備 考
			個体数	羽/km	個体数	羽/km	個体数	羽/km	個体数	羽/km	
1	ウ	ウ属sp.			1	0.02	2	0.08	3	0.02	注1
2	サギ	アオサギ	108	2.08	35	0.61	19	0.73	162	1.20	*1
3	カモ	オシドリ	13	0.25	5	0.09			18	0.13	*2
4		マガモ	81	1.56	33	0.58	27	1.04	141	1.04	
5		カルガモ					2	0.08	2	0.01	*3
6		コガモ	4	0.08					4	0.03	*4
7		カワアイサ	38	0.73					38	0.28	*5
		カモ科sp.	27	0.52	1	0.02			28	0.21	注2
8	タカ	トビ	70	1.35	29	0.51	19	0.73	118	0.87	
9		オジロワシ			3	0.05			3	0.02	*6
10		ノスリ	1	0.02					1	0.01	
11		チュウヒ					1	0.04	1	0.01	*7
12	チドリ	コチドリ	12	0.23	3	0.05			15	0.11	*8
13	シギ	イツシギ	49	0.94	40	0.70	7	0.27	96	0.71	*9
14	カモメ	セグロカモメ					29	1.12	29	0.21	
15		オオセグロカモメ					5	0.19	5	0.04	
16	ハト	キジバト	12	0.23	7	0.12	2	0.08	21	0.16	
17		アオバト			9	0.16			9	0.07	
18	カッコウ	カッコウ	15	0.29	7	0.12	1	0.04	23	0.17	
19	カワセミ	カワセミ	5	0.10	10	0.18	3	0.12	18	0.13	注3 *10
20	キツツキ	アリスイ	1	0.02	1	0.02			2	0.01	
21		アカゲラ	11	0.21	12	0.21			23	0.17	
22	ヒバリ	ヒバリ	6	0.12	7	0.12	2	0.08	15	0.11	
23	ツバメ	ショウドウツバメ	350	6.73	153	2.68	24	0.92	527	2.90	注3 *11
24		イワツバメ	14	0.27					14	0.10	*12
25	セキレイ	ツメナガセキレイ	9	0.17					9	0.07	注4 *13
26		キセキレイ	20	0.38	4	0.07			24	0.18	
27		ハクセキレイ	50	0.96	10	0.18	4	0.15	64	0.47	
28		セグロセキレイ	1	0.02					1	0.01	*14
29	ヒヨドリ	ヒヨドリ	10	0.19	5	0.09			15	0.11	
30	モズ	モズ	2	0.04	1	0.02			3	0.02	
31	ツグミ	ノゴマ	2	0.04	2	0.04			4	0.03	
32		ノビタキ			3	0.05	2	0.08	5	0.04	
33		アカハラ	18	0.35	10	0.18			28	0.21	
34	ウグイス	ウグイス	10	0.19	2	0.04			12	0.09	
35		エゾセンニュウ	8	0.15	12	0.21			20	0.15	*15
36		コヨシキリ	9	0.17	11	0.02	12	0.46	32	0.24	*16
37		オオヨシキリ	1	0.02	3	0.05	2	0.08	6	0.04	*17
38		センダイムシクイ	2	0.04					2	0.01	
39	ヒタキ	キビタキ	6	0.12	1	0.02			7	0.05	
40	シジュウカラ	シジュウカラ	5	0.10	8	0.14			13	0.10	
41	メジロ	メジロ	3	0.06					3	0.02	
42	ホオジロ	ホオジロ	1	0.02	1	0.02	1	0.04	3	0.02	
43		ホオアカ	1	0.02					1	0.01	
44		アオジ	52	1.00	26	0.46	2	0.08	80	0.59	
45		オオジュリン					7	0.27	7	0.05	*18

46	アトリ	カワラヒワ	18	0.35	37	0.65	3	0.12	58	0.43	
47		ベニマシコ	3	0.06	4	0.07			7	0.05	
48	ハタオリドリ	ニュウナイスズメ	49	0.94	44	0.77	1	0.04	94	0.70	
49		スズメ	1	0.02	17	0.30			18	0.13	
50	ムクドリ	コムクドリ	5	0.10	8	0.14			13	0.10	
51		ムクドリ	141	2.71	172	3.02			313	2.32	
52	カラス	ハシボソガラス	9	0.17	1	0.02	6	0.23	16	0.12	
53		ハシブトガラス	3	0.06	2	0.04			5	0.04	
個 体 数 合 計			1,256	24.15	740	12.98	183	7.04	2,179	16.14	
種 数 合 計			44 +		39 +		24		53		注 5

[調査区間] ①：神納橋～砂川遊水池 (KP. 137～KP. 85) <KP. (キロポスト)は河口からの距離を表す>
 ②：砂川遊水池～千歳川合流点付近 (KP. 85～KP. 28)
 ③：千歳川合流点付近～石狩灯台付近 (KP. 28～KP. 2)

[備考欄の注記]

- (注1) ウ属sp. : カワウまたはウミウと推定される。
 - (注2) カモ科sp. : ①区域でカモ科の一種の27羽の群上空飛翔、②区域で同種の1個体を記録。
 - (注3) カワセミ、ショウドウツバメ：営巣可能な(切り立った安全な)河岸の崖地には殆ど新旧のカワセミや巣穴やショウドウツバメの巣穴群(コロニー)が見られる。
 - (注4) ツメナガセキレイ：幼鳥を含む群を高水敷の草地2か所で記録、繁殖が推定される。
 - (注5) 種数合計には、ウ属sp. はカワウまたはウミウの可能性が高いので含めるが、カモ科sp. は記録したカモ類の中に同種が含まれる可能性があるため含めないこととする。
- (*1～*18)：後述のⅣ. 調査結果の考察の(B)に特記した18種

調査の結果、①神納橋～砂川遊水池 (KP. 137～KP. 85) 地区では44種 (+カモ科sp. 1)、1256個体を記録、②砂川遊水池～千歳川合流点付近 (KP. 85～KP. 28) 地区では39種 (+カモ科sp. 1)、740個体を記録、③千歳川合流点付近～石狩灯台付近 (KP. 28～KP. 2) 地区では24種、183個体を記録した。全区間を合計すると、53種 (+カモ科sp. 1種)、2179個体が記録された。

(注) 上記①、②、③区間のうち、③千歳川合流点付近～石狩灯台付近の調査では、川幅が広い上に、河口に近付

くに従い海から吹き付ける風や波のうねりのため左右両岸の移動は容易でなかった。河口に近付くに従い、河岸付近の高水敷には河畔林は殆ど見られず、草地によって占められている。

Ⅳ. 調査結果の考察

(A) 優占度の高い種について

各調査地区で、優占度の高い種(記録個体数の多い種)を上位10位まで挙げると表-3に示すとおりである。

表-3 調査地区別 優占度上位の種(10位まで)一覧表

① 神納橋～砂川遊水池				② 砂川遊水池～千歳川合流点付近				③ 千歳川合流点付近～石狩灯台付近				備 考
順位	種 名	記 録 個 体 数	Dom. %	順位	種 名	記 録 個 体 数	Dom. %	順位	種 名	記 録 個 体 数	Dom. %	
1	ショウドウツバメ	350	27.87	1	ムクドリ	172	23.24	1	セグロカモメ	29	5.85	(注1) ①、②でムクドリの記録数が多いのは、巣立ち後の幼鳥を伴う群が記録されたため。 (注2) 2地区以上で共通種はショウドウツバメ、ムクドリ、アオサギ、マガモ、トビ、アオジ、イソシギ、ニュウナイスズメの8種
2	ムクドリ	141	11.23	2	ショウドウツバメ	153	20.68	2	マガモ	27	14.75	
3	アオサギ	108	8.60	3	ニュウナイスズメ	44	5.95	3	ショウドウツバメ	24	13.11	
4	マガモ	81	6.45	4	イソシギ	40	5.41	4	アオサギ	19	10.38	
5	トビ	70	5.57	5	カワラヒワ	37	5.00	4	トビ	19	10.38	
6	アオジ	52	4.14	6	アオサギ	35	4.73	6	コヨシキリ	12	6.56	
7	ハクセキレイ	50	3.98	7	マガモ	33	4.46	7	イソシギ	7	3.83	
8	イソシギ	49	3.90	8	トビ	29	3.92	7	オオジュリン	7	3.83	
8	ニュウナイスズメ	49	3.90	9	アオジ	26	3.51	9	ハシボソガラス	6	3.28	
10	カワアイサ	38	3.03	10	スズメ	17	2.30	10	オオセグロカモメ	5	2.73	

Dom.% (優占度)は(その種の個体数)÷(記録全種の合計個体数)×100 (%)
 ゴシック書体の種は、①、②、③の2地区以上で共通の種を示す。

(B) 河川水辺の鳥類のうち特記しておきたい種の生息状況
河川水辺を主たる生息地とする鳥類のうち、特に下記の18種について記録の状況、生息・繁殖に関する筆者の所見等について概要を述べる。

(1) アオサギ

全域に広く分布し、上流部①で108羽、中流部②で35羽、下流部③で19羽記録された。調査時期が本種の繁殖最盛期に当たり記録数が多かった。夫々の地域で集団繁殖の可能性があり、特に上流部では本川、支川の周辺に比較的大きなコロニーが考えられる。今回の調査では確認出来なかったが、今後の調査が望まれる。

(2) オシドリ

上流部①で13羽、中流部②で5羽記録されたが、下流部では記録されなかった。特に上流部では数か所で幼鳥を含む群が記録され、この地域の本川乃至支川の樹林で繁殖しているものと推定される。

(3) カルガモ

下流部③の河口に近い水上で2羽記録されただけで、他の区域では記録されなかった。繁殖等の詳細については不明である。

(4) コガモ

上流部①で4羽記録され、他の区域では記録されなかった。番と思われる2羽を2か所で記録したが、本種についても繁殖等の詳細は不明である。

(5) カワアイサ

上流部①で38羽が記録されたが、他の区域では記録されなかった。調査時期が本種の繁殖期に当たるので、調査地周辺で繁殖しているものと思われる。雨竜川はじめこの地域に合流する支川の周辺には良好な樹林が認められ、本種の営巣に適する大径木の樹洞も残存していると推定される。

(6) オジロワシ

中流部②で高木に止まっている成鳥1羽と近くで上空を飛翔する他の成鳥1羽が記録され、更に同区域の他の場所で上空を飛翔する亜成鳥1羽を記録した。繁殖については不明である。

(7) チュウヒ

下流部③の草原上空を飛翔する成鳥1羽を確認した。繁殖の可能性が高いと思われる。

(8) コチドリ

上流部①で12羽、中流部②で3羽記録された。チドリ科では最も一般的に分布する種である。砂州、中州等、広い砂礫地に生息、繁殖する習性から、そのような環境の少ない中流域では記録数も少なく、下流域では殆ど記録されな

かった。

(9) イソシギ

上流部①で49羽、中流部②で47羽、下流部③で7羽記録された。河川、溪流、湖畔等に広く分布、繁殖する最も一般的なシギで、今回の調査でも、石狩川流域全般に亘って記録された。特に上流部①(優占度順位8位)及び中流部②(優占度順位4位)では河畔に数多く分布している。

(10) カワセミ

広く分布し、上流部①で5羽、中流部②で10羽、下流部③で3羽記録された。調査地域の河岸には崩落によって生じた新旧の崖地は認められるが、営巣に適する崖地は少なく、辛うじて少数が繁殖していることが分かった。上流部①及び下流部③では1~2か所、中流部②では数か所で繁殖が認められた。特に中流部②では最初の巣立ち幼鳥(俗に一番子)も確認され、現在二度目の繁殖に入っている番も確認された。現在使用中の巣穴や古い巣穴が各所に見られる。

(11) ショウドウツバメ

本種も全域に広く分布し、上流部①で350羽、中流部②で153羽、下流部③で24羽が記録された。上流部①では、石狩川橋上流川左岸(300以上の巣穴)、同下流側右岸(100以上の巣穴)の集団繁殖地が確認された。中流部②では、砂川遊水池下流右岸に現在営巣中のコロニー(巣穴78)を確認、岩見沢大橋上流右岸の崖地では巣穴72を数えた。下流部③では石狩大橋上・下流右岸(巣穴420以上)、新石狩大橋下流左岸(巣穴32)、当別川合流点上流左岸(現在巣づくり中の巣穴85以上)、南3号樋門付近の右岸(巣穴200以上)等、各所に新旧の集団繁殖地が認められた。

(12) イワツバメ

上流部①で14羽記録された。石狩川橋付近の構造物に営巣していると推定される少数の群が付近の上空を飛翔している。

同種の営巣に適する橋梁が少ないため記録数が少なかった。中流部②、下流部③の橋梁には本種の営巣に適する構造のものが認められないためか、殆ど記録されなかった。イワツバメの営巣に適するのは、橋の下裏の断面が逆凹形に切れ上がった構造のコンクリート橋である。

(13) ツメナガセキレイ

稚内の声問川流域の大沼付近で記録されて以来、関心が深まり、現在では声問川上流、サロベツ原野、頓別川河口付近、礼文島クシュ湖上流の草地、天塩川流域の草地、その他で記録される等、生息範囲を広げている。今回新たに石狩川でも記録された。今回の調査では、上流部①で9羽記録された。北空知頭首工上流左岸の草地の他、1か所(高水敷の草地)で幼鳥を含む5羽及び4羽の群が記録さ

れた。繁殖しているものと推定される。

(14) セグロセキレイ

上流部①で1羽だけ記録された。本州の暖地では一般的に分布する種であるが、北海道では比較的数少ない。北海道でも、かつては夏期にも、各地で見られた時期もあるが、ハクセキレイの北上に伴い、夏期には河川の上流域や山間の湖畔等に移動して繁殖し、冬期ハクセキレイの大部分が北海道を去った後に、中・下流域に移動して来る傾向が見られるようになった。しかし、近年夏期にも市内の河畔に止どまって生息繁殖するセグロセキレイが少数確認されるようになってきた。一方で、ハクセキレイとの混血も認められるようになった。今回の調査では、河畔で囀る1羽を記録した。繁殖の可能性もあるが、詳細は不明である。

(15) エゾセンニュウ

上流部①で8羽、中流部②で12羽が記録された。近年湿地や河畔の湿性植物群落の成育地が減少し、エゾセンニュウの他、コヨシキリ、オオヨシキリ、オオジュリン等、このような環境を生息・繁殖の場とする鳥類の減少が危惧されている。センニュウ属、ヨシキリ属は他の多くの夏鳥に比較して春の渡来が遅く、今回の調査時期は繁殖の初期に当たるため、上記の記録は全て囀る声や姿が確認されたもので、記録地付近で繁殖するものと推定される。

(16) コヨシキリ

広く全区域に分布し、上流部①で9羽、中流部②で11羽、下流部③で12羽が記録された。エゾセンニュウ同様、湿原や河畔の草地に生息する種で、石狩川の各地の高水敷の草地で囀声が記録された。本種も記録地付近で繁殖しているものと推定される。

(17) オオヨシキリ

上流部①で1羽、中流部②で3羽、下流部③で2羽と、全区域で記録された。コヨシキリに比較して記録数が少なかったが、縄張りに必要な面積の違いもあり、単純に生息密度の比較は出来ない。本種も上記2種同様、河畔の草地や湿原等生息環境の減少により、近年生息数の減少が心配されている。調査の時期が本種の囀りの最盛期に当たり、生息地付近で繁殖が推定される。

(18) オオジュリン

下流部③で7羽が記録された。本種も湿性植物群落に生息する種で、今回の調査では下流部の高水敷の草地で囀る個体及び営巣期の警戒行動が確認されたものである。記録地付近で繁殖しているものと推定される。

おわりに

水中、水面、砂州、河岸、湖岸、及びその周辺の樹木、

草本類を主な採餌、休息、繁殖の場とする鳥類の生息状況を調査するに当たっては、ボート、カヌー等小形舟艇を利用した水上からの調査が極めて有効、必須であることは、ここ数年の調査の結果から確信を得たところである。

特にカワセミ、ヤマセミ、シヨウドウツバメ等、崩落によって出来た河岸、湖岸の崖地の砂土層に横穴を掘って営巣する鳥類の調査では水上からの調査が不可欠である。

また、カワアイサ、オシドリ、マガモ、コガモ等、営巣か所（樹洞や河岸の草地等）の確認が困難な鳥類の調査でも、孵化後水上に移動してから確認の方が容易、有効である。

更に、イワツバメ等河川に架かる橋梁や構造物を利用して集団で営巣する鳥類の調査でも、水上から調査測定する方が正確な結果が期待出来る。

近年の科学技術の進歩により、衛星を利用して正確な位置の確認も出来るようになった。

この度の調査報告を通じて、今後、石狩川の神納橋より下流の鳥類の調査研究を心掛ける方々の比較検討、及び他河川との比較に際し参考に供することができれば望外の喜びである。

付記しておきたい鳥類の種の識別について

鳥類の生息状況を調査するに当たっては、当該地域に生息する種の習性等、生態に関する知識が必要であることは勿論であるが、『鳴声』による種の識別に習熟することが肝要である。

鳥の姿を見てから種を識別するのでは、特に繁殖期の数多い出現の場合等、間に合わないことが多く、殆ど姿を見せない種の識別は不可能である。

鳴き声で種を識別する場合でも、囀り（囀声、囀鳴）は幾つかの種を除いては、一般に高音で他の鳥と際立った違いがあるため、識別が比較的容易であるが、囀りの時期は繁殖期に限られるのが普通で、他の時期には地鳴き（地鳴、警戒声も含まれる）によって区別する必要が生ずる。

更に、厄介なのは繁殖期のヒナ（巣中の幼鳥）や巣立ち後の幼鳥の鳴き声によって種の識別を行うことである。これらの識別に熟達することは容易ではないが、限られた数のこと、不可能ではない。

要は鳥類の識別に対する、と言うより、鳥類そのものに対する愛情と熱意である。

鳥類の生息状況を調査する仕事を軽んじたり、必要に迫られ仕方無しに調査するなど論外である。

蛇足を申し上げてしまったが、鳥類の識別は奥深い故に興味もまた一入であることを申し添え、報告を終ることにする。

2002年10月記

〒070-0933 旭川市春光町2区3条244-3

北海道大学構内の野鳥四季

山田雅仁(エコウォッチング)

バーダーの中には、主に探鳥会に参加する人、遠出する人、ある野鳥に注目する人、珍鳥を追いかける人など様々な楽しみ方があると思います。私はある場所を選び、通年で野鳥観察をして、その場所における野鳥の生活史を見たいというきっかけで、札幌市の中心部に位置する北海道大学(以下、北大)構内をフィールドとして選び、野鳥観察を行っています。1999年4月から始め、週末に3時間ほど歩いています。観察を続けていくうちに、地道に記載を続けることの重要性にも気づいてきました。

北大構内の南側は、豊平川の札幌扇状地の末端に位置しており、かつてはメムという泉が湧き出していました。そこからサクシュコトニ川が北方へ流れ出ていました。そのため北大構内は、湿った環境を好むハルニレやヤチダモなどの樹種が多いのが特徴です。また川沿いにはアイヌ人住居跡も数多く見られることから、かつては豊かな自然の恩恵を受けて生活していたことがわかります。現在では、原生林(写真1)も残っていますが、多くは様々な環境変化(表土攪乱、地下水位低下、植栽、伐採や面積の減少、帰化植物の侵入など)の影響を受けています(春木ほか1989)。それでも北大構内は札幌市街地にある都市域孤立林として、生き物にとって貴重な存在となっています。

表1は、1999年4月から2002年10月までの157回の観察から、確認した野鳥の種類とその時期をまとめたものです。4年間で82種類の野鳥を観察することができました。そのうち17種(21%)は1度確認できただけの種類です。北大

構内で観察できる種を時期別に独断で判断したものではありません、留鳥が、トビ、アカゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラスの11種です。また夏鳥13種、冬鳥11種、旅鳥21種となっています。営巣を確認できた種(幼鳥の確認のみを含む)は、マガモ、トビ、アカゲラ、アカハラ、ハシブトガラ、シジュウカラ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシブトガラスの10種です。その他にも営巣している可能性のある種が8種あります。このように北大構内は、原生の自然を部分的に留めているにすぎませんが、一時的に滞在する多くの種をも受け入れることのできる自然の多様性を有してあります。

次に観察を通して、個々の興味ある話を紹介します。

マガモの個体数：マガモは、ほとんどが大野池で見られます。その確認できる時期は大野池が融解してから、結氷するまでの間に限られます。2000年4月から2002年10月までマガモの個体数を数えていますが、季節によって特徴ある変動を示しています(図1)。3年とも4~7月では数羽から20羽前後で推移します。8~9月にかけて、急激に増加し、10~11月にかけて緩やかに増加します。そして結氷すると全てなくなります。春になるとまた数羽から始まっていきます。この間オスは6月下旬頃からエク립ス羽に変化しはじめ、9月下旬頃から繁殖羽に変化しはじめます。秋になると個体数が増加するというは納得できますが、春に個体数が少ないというのは、越冬できなかった個体がかかり多いということでしょうか？

アカゲラの巣穴：北大構内では毎年アカゲラが営巣しています。営巣の巣穴はその年の融雪時に新しく彫ったものを使います。2001年にはあるニワウルシに巣穴を開けて、アカゲラが営巣しました。翌2002年にも、その巣穴に注目していましたが、なんとコムクドリが営巣していました。コムクドリの営巣期間中にもかかわらず、時々スズメがその巣穴に出入りしていました。コムクドリの幼鳥が巣立ってしまうと、すかさずスズメが営巣を始めました。2002年にあるオニグルミに巣穴を開けてアカゲラが営巣しました。その幼鳥が巣立ったあと、2週間後に同じ巣穴でコムクドリが営巣をはじめました。



5月13日



6月24日



11月20日



12月24日

写真1 原生林の四季

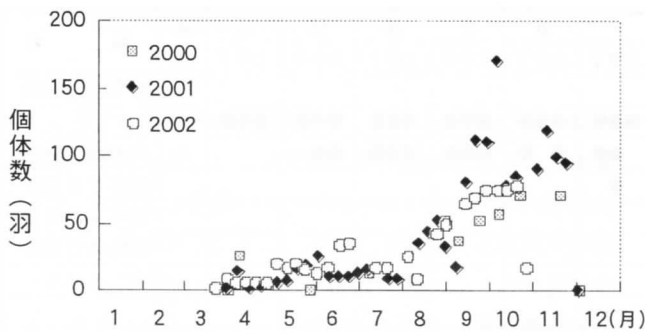


図1 大野池のマガモの個体数変動

アカゲラの巣穴は他種の野鳥が再利用によって、営巣を手伝っているという相互作用に感動しました。

ツグミの食欲：2001年1月下旬に北大構内がツグミだらけになったことがありました。どのナナカマドの木にも、ツグミが実を食べていました。1週間後に同じ木を見てみると、それまでたわわになっていた実がほとんどなくなってしまいました。そして北大構内のナナカマドの実がなくなるとツグミはどこかへ行ってしまいました。

ヤマガラ不思議：表1を見ていただくと気がつくますが、留鳥であるヤマガラが7月にかぎって、存在が確認できなくなってしまう。この時期、どこかで地鳴きでも聞こえないかと耳を澄ましているのですが、それでも確認できません。彼らは葉の茂った樹冠で地鳴きもせずに行動しているのでしょうか。それとも別の場所に移動してしま

うのでしょうか？

カケスのきまぐれ：観察をはじめた1999年4月から2000年11月まで、北大構内でカケスを1羽も見ませんでした。ところが2001年9月から2002年4月までは、毎週カケスの姿を見ることができました。いったいどんな周期でカケスはやってくるのでしょうか？

変動の大きい農場：このような広い農場（草原）は、実習用に人工的に作り出された環境です。夏季には作物が目まぐるしく入れ替わり利用されています。安定した環境ではないためか、農場を定住する野鳥はヒバリ、スズメ、ハシボソガラスくらいです。

百年記念館付近の魅力：この辺りは面積としてはあまり大きくありませんが、多種多様な野鳥が見られることに驚かされます。池は人工的だし、植林もあるし、人通りもそれなりにあります。その原因はかつてサクシュコトニ川が流れていたときに削られた複雑な地形、樹木の階層構造、それと池の上を樹冠がうっそうと茂っていることにありそうです。

[引用文献]

春木雅寛、露崎史朗、滝川貞夫（1989）：北海道大学構内の樹種構成について、北海道大学農学部演習林研究報告、46(1)、191-222.

〒065-0015 札幌市東区北15条東4丁目10-2

表1 北海道大学構内の野鳥観察記録（1999年4月～2002年10月）

	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		備考
	旬	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下		
アオサギ														●											00年7月1日
マガモ					●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	○	大野池の融解時
カルガモ									●	●								●	●						02年のみ
コガモ																			●						99年10月2日
オナガガモ																			●						02年10月27日
トビ		●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	○	
オオタカ			●																●	●	●	●			
ツミ							●																		
ハイタカ		●																							
ノスリ																				●					
ハヤブサ																				●					01年11月17日
チゴハヤブサ																			●						01年10月2日
セグロカモメ												●										●			
オオセグロカモメ					●●	●																			
キジバト						●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	△	
アオバト																			●	●					02年10月6日
ツツドリ								●										●●							秋は幼鳥のみ
ハリオアマツバメ							●●	●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●		
アマツバメ							●	●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●		
ヤマゲラ															●	●	●	●	●	●	●	●	●		
アカゲラ		●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	○	
コゲラ														●					●						
ヒバリ					●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	△	
キセキレイ																			●●●	●●●					
ハクセキレイ		●●●	●	●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	△	

	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	営 巢	備 考
	旬	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下		
ビンズイ						●									99年5月15日
ヒヨドリ		●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	△	
モズ					●●●	●●●	●●	●●	●●	●●●	●●●	●●		△	年々減少傾向
アカモズ								●							02年7月13日
ヒレンジャク				●											99年4月3日
ミソサザイ				●											02年4月13日
コマドリ					●						●●				
コルリ						●●									
ルリビタキ					●●						●●	●			
ノビタキ				●●											
マミジロ						●									02年5月18日
クロツグミ						●				●	●●				
アカハラ						●●●	●●	●	●●		●●			○	
シロハラ				●							●●●				
マミチャジナイ										●●	●●				
ツグミ	●●●	●●●	●●●	●●●	●					●	●●●	●●●	●●●		
ヤブサメ						●				●					
ウグイス				●●	●					●	●●●	●●	●		
エゾセンニュウ							●●●								
シマセンニュウ							●								00年6月7日
コヨシキリ						●									00年5月27日
メボソムシクイ						●	●●●				●				
エゾムシクイ						●●●			●	●					
センダイムシクイ						●●	●		●●	●●					
キクイタダキ				●							●	●	●		
キビタキ						●●	●	●							
ムギマキ											●●				
オオルリ						●●				●					
サメビタキ										●					
エゾビタキ										●●	●				
コサメビタキ						●●	●		●	●●●	●				
エナガ											●				
ハシブトガラ	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	○	
ヒガラ	●●	●	●●●	●●	●●					●●	●●●	●●	●●●		△
ヤマガラ	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●			●●	●●●	●●●	●●●	●●●		○
シジュウカラ	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●		
ゴジュウカラ	●●●	●●	●●●	●●●	●●●	●●●			●●	●●●	●●●	●●●	●●●		
キバシリ	●			●							●	●	●		
メジロ				●	●					●	●				
ホオジロ			●												02年3月31日
アオジ				●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●			△	
アトリ				●							●				
カワラヒワ	●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	△	
マヒワ				●							●	●●	●		
ベニヒワ	●	●	●	●									●		
ハギマシコ			●												01年3月24日
イスカ			●	●●											
ウソ	●●	●	●●												
イカル					●										02年5月18日
シメ	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●					●	●●●	●●●	●●●		
ニューナイスズメ				●											02年4月20日
スズメ	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	○	
コムクドリ				●	●●●	●●●	●●●	●						○	
ムクドリ	●●●	●●	●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●			●●	●	●	○	
カケス	●●●	●●●	●●●	●●						●	●●●	●●●	●●●		年変動大
ハシボソガラス	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	△	
ハシブトガラス	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	○	

営巢：○巢または幼鳥による確認、△可能性あり

北海道における繁殖期のコムクドリの分布

藤 卷 裕 蔵

今回は繁殖期におけるコムクドリの分布の紹介である。調査方法は、カケスの分布(121号)で述べたとおりである。これまでに、617区画(1区画は約5km四方の大きさ)で調査した。1区画で2か所以上調査したこともあるので、調査か所数は全部で690である。この調査結果に基づき、約10km四方の区画を1点とした分布図を示し、調査路690か所を環境ごと、標高ごとに区分し、コムクドリの生息状況についてまとめた。用いたデータは自分の観察記録であるが、このほか分布図を作成する場合にはこれまでに発表された論文、調査報告書、日本野鳥の会の各支部の支部報の記録(1970年代以降)も用いた。

分 布

図1は、前述のように10km四方の区画(1/25000の地形図1枚に相当する)を単位として繁殖期のコムクドリの分布を示したものである。北海道北部、渡島半島、オホーツク海側では得られた観察記録が少なく、空白部が多いが、上川盆地、十勝平野、根釧地方などおもに低地に分布しており、十勝・釧路間の白糠丘陵のような山間部、日高山脈や大雪山系のような標高の高い地域には分布していない状況がうかがえる。

生息環境

生息環境については、ハイマツ林、常緑針葉樹林(人工林も含む)、針広混交林、落葉広葉樹林、カラマツ人工林、農耕地・林(観察路沿いの環境の20%以上が林地の場合)、農耕地、住宅地の8つに区分し、環境・標高別に出現率(調査路数に対するコムクドリが観察された調査路の割合)を表1に示した。

森林のうち、コムクドリが観察されたのは落葉広葉樹林だけで、それも1か所、出現率1%である。この結果からみれば、コムクドリは森林には生息しないといつてよいくらいである。観察されたのは、農耕地・林、農耕地、住宅地で、これらの生息環境の間に出現率はそれほど大きな差はない。標高別にみると、コムクドリが観察されたいずれの環境も標高600m以下である。

コムクドリは樹洞営巣性なので樹木のある環境を必要とするはずであるが、農耕地・林と農耕地の間に出現率に大差がないのは、「農耕地」とした調査路のなかには防風林があったり、庭に樹木のある農家があったりするため、またコムクドリが樹木の少ない環境にもよく飛来するためとおもわれる。住宅地での出現率が農耕地・林や農耕地と大差なかったのは、住宅地には樹木のある庭があったり、



図1. 北海道における繁殖期のコムクドリの分布

一つの丸は約10km四方の区画を示し、1/25,000地形図に相当する。
●=生息が確認された。○=調査したが、観察されなかった。・=未調査の区画。

樹木のある公園があるためであろう。

フィールドガイドによると、コムクドリは「低地の明るい林にすむ」とある。たしかに標高の点では低地に生息するが、生息環境の点でみると、むしろ林より農耕地・林、農耕地、住宅地で営巣に適した樹洞のある樹木が生育しているような環境が主要なものと言えるのではないかとおもう。

表1. コムクドリの生息環境別・標高別の出現率 (%)

生息環境	調査路数	標高 (m)					計
		-200	201-400	401-600	601-800	801-	
ハイマツ林	11	-	-	-	0	0	0
常緑針葉樹林	11	0	0	0	0	0	0
針広混交林	123	0	0	0	0	0	0
落葉広葉樹林	124	2	0	0	0	0	1
カラマツ人工林	24	0	0	0	-	-	0
農耕地・林	184	21	5	14	0	-	17
農耕地	189	23	21	0	-	-	22
住宅地	24	24	0	0	-	-	21

125号で紹介したニューナイスズメも樹洞に営巣する森林性の鳥であるが、農耕地・林や農耕地でもかなり普通に生息しているという点で、コムクドリに似ている。しかし、

森林と農耕地におけるこの2種の出現率を比べると、ニューナイスズメの出現率が農耕地・林で59%、農耕地で46%といずれもコムクドリの17、22%よりはるかに高く、コムクドリは「非森林性の鳥」であると言ったほうがよいくらいである。

このようなコムクドリの生息状況の特徴をみると、農耕地内の残存林、公園、一般家庭の庭で樹洞のできるような樹木の存在が非常に重要である。しかし、一部の農耕地内残存林を除くと、樹洞のあるような大木はそれほど多くはない。さらにこのような老齢木は、危険防止のため伐採される可能性の方が大きいのではないかとおもう。同じような環境を必要とするニューナイスズメの農耕地・林と農耕地における出現率が、前述のようにコムクドリの場合よりはるかに高いのは、ニューナイスズメのおもな営巣場所が樹洞よりむしろ電柱の横木となっている鉄パイプであるためであろう。今のところコムクドリは普通に見られる鳥であるが、鉄パイプに営巣した例はないので、森林以外の環境で樹洞のある木をきちんと守っていかないと希少種になってしまうかもしれない。

〒072-0005 美唄市東4条北2丁目6-1

長万部でツクシガモを観察

新城 久

2002年10月6日、所用のため車で札幌から函館へ向かっていました。午前10時ころ、国道5号線が渡島管内長万部町の浜に沿うところ（地図上では大浜と記されている）を走っていたら、浜辺にカモメ類が群れており、そのすぐ近くに1羽の見慣れないカモがいるのが見えました。遠目でも普通のカモではないと感じ、車を止めて落ち着いて見たところ、その独特の色合いなどからツクシガモであることがすぐわかりました。

そのツクシガモは、波が引く時に砂の上でピチピチはねる小エビのようなものをさかんに食べているようでした。餌採りに夢中なのか、写真撮影のため20mほどにまで近寄っても警戒する気配は感じられませんでした。

30分ほど観察や写真撮影をし、そろそろ引き上げなくてはと思ったころ、国道の方からやはりそのツクシガモをカメラで写している人がいることに気がきました。同好のよしみで少し話をしましたが、その人によると、ツクシガモは2週間ほど前からいるとのことでした。おそらく地元の人たちはその間ずっと見守っていたことと思われませんが、たまたま通りがかって、このような珍しいカモを見られた私はとても運がよかったと感じています。

〒011-0027 札幌市北区北27条西12丁目6



ツクシガモ 長万部町 2002年10月6日

[編集部より]

ツクシガモはマガモやカルガモよりも少し大きい大型のカモです。ユーラシア大陸中央部などで繁殖し、日本には冬鳥として定期的に渡ってきますが、九州が中心で、北海道で見られることは極めて希です。これまでに胆振、根室、石狩管内などで記録がありますが、通算でも10例に満たないものと思われます。海浜、干潟、内陸の湖沼などの浅く水があるところで、嘴を水面につけて甲殻類や海藻類などを食べます。水の深いところでは逆立ち採餌もします。

フルマカモメは冷凍サンマがお好き

島田 芳郎

フルマカモメとの出会いを報告します。2002年7月20日。生来から不器用で釣りの苦手な私ですが、友人から誘われるまま網走港から船釣りに出掛けました。午後2時頃、能取湖の沖合3～4km附近に近づくと漁船はエンジンを停止し、魚群探知機で海中を探りながら波間を漂い始めました。このとき、四方から6～7羽の海鳥が低く滑空してきて、船尾付近に着水。漁船は魚群を求めて何回か移動しますが、皆、後を追ってきます。ここには他にも数隻の釣り船がいましたが、どの船にも数羽ずつつきまっています。

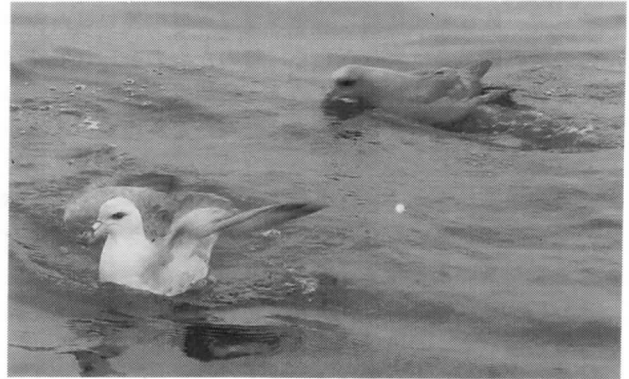
一見するとカモメに似ていますが、嘴の基部にはゴツゴツとした特異な鼻管が目立ちます。それは、まるで砕け散った陶器を接着剤で張り合わせた様な複雑な形状です。顔立ちは可愛らしく、目つきがきついカモメとは対照的です。船上で釣り餌用に冷凍サンマを2cm幅にブツ切りにし、頭等のアラを海に捨てると、競ってこれを探りに寄ってきます。アラだけではなく、海中に投げられる餌そのものも狙って船縁まで近づきます。警戒心がきわめて薄く感じられました。

新米バーダーの私には識別できず、慌てて撮ったのがこの写真です。宿に帰って早速図鑑を調べ、ミズナギドリ科フルマカモメと分かりました。初めての鳥と出会うときはいつも感動的ですが、ミズナギドリの仲間は、遠い洋上で人間社会とは無縁に孤高な生き方をしているとの勝手な思い込みがあったからでしょうか、あまりにも人慣れた姿は意外で印象的でした。フルマカモメには暗色型と淡色型

がありますが、たくさんいたフルマカモメの中でも、淡色型はカメラに収められた左側の1羽だけでした。

またフルマカモメに出会うとしたら、やっぱりフルマカモメ（昼間かもネ）。

〒002-8072 札幌市北区あいの里2条6丁目3-3-806



フルマカモメ 網走港 2002年7月20日

【編集部より】

フルマカモメはサハリンや千島列島などで繁殖し、冬鳥として北海道の近海に渡来します。北海道北部の海上では夏にも観察されますが、繁殖記録はありません。生活の大部分を外洋でおくるため、身近に見られることはあまりありません。



鶴川探鳥会に参加して

2002. 8.18

荻野裕子

会員になって10年目、毎回野鳥だよりが送られて来るのを楽しみにしていましたが今回初めて鶴川探鳥会に参加させていただきました。私のフィールドは主に西岡水源池なのですが山野の鳥を観察する機会が多いせいにかシギ、チドリは識別は苦手でした。このたび参加させていただきしたのは毎日開いている愛護会ホームページの野鳥情報伝言板に刺激を受けまして諸先輩方にシギ、チドリをレクチャーしていただきたいと思ったからです。当日は生憎どんよりとしたお天気で風も強かったのですが鶴川河口は牧草の緑が美しく映えウンランの黄色、ムシトリナデシコの紅紫が彩りを添え、その中をゆったりと気持ち良く探鳥することができました。湿地ではチュウビの捕食する姿も観察できましたし海岸では強風にも負けずにいるアジサシも観察できました。残念ながら期待していたシギ、チドリは3種だけの確認でしたが私の好きなコアオアシギをしっかりと

観察することができました。たくさんの参加者の熱いまなざしを受けコアオアシギはなんだか戸惑っているように見えたがスクッとした姿はとても気品がありました。いにしへの歌人は夜のシギの声に秋の訪れを感じたようですがコアオアシギがこんな華奢な姿で長い南への旅路を続けて行くのかと思うとなんだか物悲しい気持ちになります。

今回初めて愛護会探鳥会に参加させていただき皆様の適切で豊かなアドバイスと温かな人柄にふれることができました。感謝いたします。ありがとうございました。これからも探鳥会に参加させていただけるのを楽しみにしております。
〒062-0041 札幌市豊平区福住1条6丁目1-13

【記録された鳥】アオサギ、トビ、チュウビ、ハヤブサ、シロチドリ、コアオアシギ、アオアシギ、イソシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、アジサシ、キジバト、ヒバリ、ハクセキレイ、ノビタキ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上 21種

【参加者】板田孝弘、岩崎孝博、白田 正、大荒田忠良、岡田幹夫、荻野裕子、小山内恵子、佐藤幸典、佐藤正秀、島田芳郎・陽子、栗林宏三、小堀煌治、高栗 勇、高橋成人、田宮耕三・ひろ子、道場 優、樋口孝城、松原寛直・敏子、三船喜克・幸子、村田静穂、山口和夫、山田良造

以上 26名

【担当幹事】佐藤幸典、岡田幹夫

コムケ湖・能取湖一泊探鳥会

2002. 8.31～ 9. 1 白田 正

コムケ湖・能取湖一泊探鳥会は、今年のバードウォッチングのハイライトとなる興奮と感動の2日間でした。

行き届いた準備と、心温まるお世話をいただいた幹事の皆さん、本当にありがとうございました。

コムケ湖では、上空を飛ぶチュウシャクシギの雄姿や、地元の大館和広氏による、オオタカの爪にかかり絶命したメダイチドリの説明が印象的でした。

そして、能取湖へ移動し、サンゴソウ群生地で見たシギたちの群れ遊ぶ姿は素晴らしく、時のたつのを忘れて見惚れてしまいました。シギをこのように間近で見るのは初めてのことでしたので、しばらくはただただ眺めているばかりでした。

翌日の濤沸湖では、目に染むようなベニマシコです。バスの発車時刻が来ても立ち去りがたく、幹事さんには気をもませてしまいました。ごめんなさい。

さらに、昼食の広場では子育て中のオジロワシです。見事に魚を捕らえ、幼鳥の待つ木の茂みに消えます。そして、しばらくすると、また飛び立ちます。今度は幼鳥2羽も続きます。その幼鳥が上空で見守る中、またもや鮮やかなハンティングです。40cmはあろうかという獲物をつかみ対岸に降り立ち、幼鳥に与えていました。

それやこれやで、まさに「鳥三昧」の二日間でしたが、私にとって、最も心に残ったのは、実は能取湖で見た「トウネン」でした。それも肉眼で見て始めてわかった、実感としてのこの鳥の「小ささ」です。今まで双眼鏡かスコープでしか見ることができなかったせいも、シギの体形イメージから、どうしてもこのような「小ささ」の実感が得られなかったのです。自然の摂理とは云いながらも、こんな小さな翼で長距離を飛び、無為に命を落とす個体も多数あることでしょう。コムケ湖で見た、メダイチドリのなきながらオーバーラップして、ふと、こみ上げてくるものがありました。力いっぱい飛ぶ翼下面の白さが、いつまでも目に焼き付いていました。

朱き草の 水際に在りて トウネンは
白き小さき つばさ悲しも

〒064-0913 札幌市中央区南13条西18丁目1-3



【記録された鳥(2日間の記録)】カイツブリ、ミミカイツブリ、ウミウ、アオサギ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、オオタカ、ハヤブサ、ヒシクイ、コガモ、マガモ、カルガモ、カワアイサ、タンチョウ、メダイチドリ、オグロシギ、オオソリハシシギ、チュウシャクシギ、ホウロクシギ、アオアシシギ、タカブシギ、ソリハシシギ、イソシギ、キアシシギ、キョウジョシギ、コオバシギ、オバシギ、トウネン、ハマシギ、キリアイ、エリマキシギ、ウミネコ、カモメ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、トウゾクカモメ、アジサシ、キジバト、アオバト、アマツバメ、カワセミ、ヒバリ、ハクセキレイ、ノビタキ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上 52種

【参加者】赤沼礼子、池田みちえ、石橋和子、板田孝弘、井上公雄、岩崎孝博、白田 正、大町欽子、岡田幹夫、荻野裕子、片山 實・慶子、蒲澤鉄太郎、亀井厚子、岸谷美恵子、栗林宏三、小西美美子、小林紀子、小堀煌治、佐藤典子、志田博明・政子、品川睦夫、島田芳郎・陽子、清水朋子、白澤昌彦、高橋良直、田中志司子、戸津高保・以知子、富川 徹、中正憲信・弘子、広木朋子、松原寛直・敏子、村田静穂、村上トヨ、山田良造、山本昌子、山口和夫・雪幸、横山加奈子 以上 44名

【担当幹事】蒲澤鉄太郎、栗林宏三、清水朋子、戸津高保

鵲川探鳥会

2002. 9. 8

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、ミサゴ、トビ、チュウヒ、チゴハヤブサ、コガモ、マガモ、カルガモ、ムナグロ、ダイゼン、タシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、アジサシ、キジバト、カッコウ、カワセミ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、モズ、ノビタキ、コヨシキリ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上 32種

【参加者】石田典也、岡田幹夫、小山内恵子、門村徳男、川村宣子、小山久一、佐藤幸典、白澤昌彦、島田芳郎・陽子、新城 久、関口健一、高橋良直、高野雅則、田中哲郎、戸津高保、登野泰信、富川 徹、中正憲信、納家 仁、成澤里美、樋口孝城、安真一郎、柳川 巖、山口和夫、鷺田善幸 以上 26名

【担当幹事】富川 徹、中正憲信

宮島沼探鳥会に参加して

2002.10.13 山本和昭

4月下旬に20年振りに宮島沼へ出かけ数百羽のマガンの群れによるV字編隊飛行、体を左右に振りながら着水する風景に感動してしまいました。それからは毎週のようにマガンの着水ショウを目的に通ったが、マガンばかりではなく他のガン・カモ類に興味を沸き5月の上旬の宮島沼が閉まる日から地方へ出かけるようになりました。そしてバードウォッチングに必要な双眼鏡、フィールドスコープ、野鳥ウォッチングガイドを購入して、苫小牧のウトナイ湖、

長沼の長都沼、根室の春国岱原生野鳥公園、別海の尾岱沼、白鳥台、野付半島のネイチャーセンターなどに出かけました。

そして又マガンがシベリアから帰る季節になり10月上旬に宮島沼に出かけました。その時出合った野鳥愛護会の方に探鳥会を知り今回の参加になりました。初参加して思った事は、野鳥は春になると羽が徐々に美しい夏羽へと変わり観察しやすいが、秋から冬羽に変わる季節は野鳥観察が難しい事を野鳥愛護会の会員の方に教えてもらいました。野鳥観察の楽しさや難しさを感じながら次回から参加させていただきます。

〒069-0373 岩見沢市幌向3-3

【記録された鳥】カイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリ、アオサギ、ミサゴ、トビ、オジロワシ、チュウビ、ノスリ、ハヤブサ、コクガン、カリガネ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、オカヨシガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ミコアイサ、アオジ、カワラヒワ、ムクドリ 以上 28種

【参加者】荒木良一、泉 勝統、板田孝弘、井上公雄、岩崎孝博、内山正裕、岡田幹夫、荻野裕子、岸谷美恵子、後藤義民、佐藤幸典、佐藤ひろみ、品川睦生、渋谷信六、島田芳郎・陽子、関口健一、高橋成人、高橋良直、高栗 勇、田子元樹・園江、徳田恵美、戸津高保、中正憲信・弘子、原 美保、樋口孝城、松原寛直・敏子、真壁スズ子、水上砂恵子、安真一郎、山田良造、山本和昭、吉田慶子、横山加奈子 以上 37名

【担当幹事】佐藤幸典、佐藤ひろみ

野幌森林公園の探鳥会に参加して

2002.10.20 米 倉 セツ子

晩秋の野幌森林公園は、行く秋をおしむ様に、黄や赤の葉で色づいた樹々の間からキラキラと、やさしいこもれびがさし、地面いっぱい、敷き詰められた落葉を、サワサワと踏みしめて歩けば、やさしい丸い風がふき、早くも大沢口附近では数羽のハシブトガラの出迎えに合い、嬉しい気持ちで胸がいっぱいになりました。

私が忘れる事の出来ない渡り鳥との出合いは、札幌に来る今から二年前長年住んでいた故里(妹背牛町)での事でした。季節も今頃の夜の10時すぎ、仕事帰りに主人と二人で見た白鳥の群でした。寒い夜の月明かりの中を、北東方向より南西方向に、向って渡る何十羽と云う白鳥の群に出合ったのです。カオーカオーカオーと云う鳴き声と共に、扇状の形を描いて、リーダーを先頭に飛ぶ姿を見た時、何とも云えぬ深い感動と共に、これからどこに行くの、この夜中何を目印にとんでいくの、気を付けて、誰も仲間はずれない様にたのむね、と心の中で、先頭のリーダーにたのんでいた自分がいた事を思い出します。野幌自然森林公園の中では三羽のコガモの愛らしい、けなげな姿、こんな所でウロウロしないで、早く暖かい南の国にかえりなさいと、探鳥会のメンバーの方に声をかけられているアオジとの、嬉しい出合いもあり、本当にやさしい豊かな気持ちにさせていただきました。自然の摂理にもとづいて生きてい

る多くの動植物から人間は多くの事を、教えられ学び、いやされ、又うるおいを与えられている事に感謝するとともに、私たちは、決してその生態系をおかす事なく生命が尽きずに巡る事や、どんな命も無意味でない事を、次の世代にたくす事の大切さを本日の探鳥会に参加させていただき教わった事に、深く感謝しております。

〒001-0023 札幌市北区北23条西3丁目1-13

【記録された鳥】トビ、コガモ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、カシラダカ、アオジ、クロジ、マヒワ、シメ、カケス、ハシブトガラス 以上 20種

【参加者】栗林宏三、米倉寛治、村田静穂、赤沼礼子、斉藤正雄、山川美香、後藤義民、尾崎 脩、佐々木裕、米倉セツ子、竹中宏二、浪田良三、高橋良直、徳田和美・恵美、小島賢司、中正憲信・弘子、戸津高保、品川睦生、佐伯武美、石田典也、川村宣子、小島佳子、山本和昭、田辺 至、松原敏子、今村三枝子、村上トヨ、温井日出夫・潤子、大西典子、西川孝義、小西美美枝、岡田 実、鎌田玲子、吉田慶子、小山久一 以上 38名

【担当幹事】村田静穂、戸津高保

藤 巻 裕 蔵 氏

(前日本鳥学会会長、帯広畜産大学名誉教授、愛護会顧問) から

★お手伝いをします。調査・研究のまとめ

野鳥愛護会の会員の中には、鳥を観察するだけではなく、記録をきちんととっている方は少なくないと思います。さらに、それらを論文などにまとめようと考えている方もおられると思います。このような記録の中には、まとめるいろいろな事実が明らかになり、貴重なものも少なくない、常々私は考えています。しかし、観察・調査の記録をまとめて論文にしようとする場合、いずれかの雑誌に投稿することになりますが、どの雑誌でも「投稿規定」が定められていて、これに従ってきちんとまとめようとする、慣れていない人にとっては大変で、ついつい論文にまとめることをあきらめてしまうことになるのではないのでしょうか。発表すれば、多くの人に役立つ内容のものを、そのまま置いておくのはもったいないと思います。

私は、1975年以来帯広畜産大学で仕事の一部として卒業論文研究の指導をしてきました。卒業論文研究は、「自分で計画し、調査・実験してデータを取り、それを処理し、関連文献を調べ、まとめる」ものですが、これはほとんどの学生諸君にとって初めての経験だと思います。これまで、私が直接指導した学生は、大学院修士・博士課程も含めると、70人近くになりますが、みなこの「初めて経験」をして巣立っていきました。また、私は他の研究者が学術雑誌に投稿した論文の査読(論文の内容について改善すべき点を指摘するなどの作業)もかなり経験しています。

2002年3月末に大学を退官し、指導する学生もいなくな

りましたので、その分これまでの経験を生かして、観察・調査・研究についてまとめたいと考えている方のお手伝いをさせていただきたいと思っています。とりあえずは、自分の観察・調査記録をもって、それをなんらかの形でまとめたいと考えている方のお手伝いをさせていただきたいと思っていますので、遠慮なくご相談ください。

連絡先は、

〒072-0005 美瑛市東4条北2丁目6-1

または、bonasa38@blue.ocn.ne.jp です。

これまでに私が指導した修士・博士課程の論文はほとんど学術雑誌に投稿されていますが、学部の卒業論文でもで

きるだけ学術誌に投稿するようにしてきました。参考までに、私の在任中に私が指導した卒業論文のうち日本鳥学会誌に7編、山階鳥類研究所報告に4編、ストリクスに1編、大学の紀要に4編が掲載されていますし、これからも数編投稿する予定です。

★「エゾライチョウ」を差し上げます

エゾライチョウの生態についてまとめた小冊子「エゾライチョウ」を差し上げます。希望する方は、送料(切手210円分)同封の上、前記住所の私宛に申し込んで下さい。



【小樽港】 2003年1月19日(日)

小樽港周辺で見られる海ガモ類などを観察する、野鳥の会小樽支部と合同の探鳥会です。オオハム、アカエリカイツブリ、ホオジロガモ、ウミガラスなどのほか、カモメ類や猛きん類も良く観察されます。日和山

灯台付近、祝津漁港、小樽埠頭などの各観察ポイントを、貸切りバスで辿りながらの探鳥会です。

なおバスを利用しますので申込制になります。

集合=JR小樽駅待合室 9時30分

申込先=白澤昌彦宅 011-563-5158

午後6時~8時までをお願いします。

締切り=1月12日(日)まで

参加費=1,000円程度の予定です。当日受付時にお納めください。

【野幌森林公園】 2003年2月2日(日)

冬の最も厳しい季節の中でカラ類、キツキ類などの留鳥が活動しています。冬鳥として渡ってきたレンジャク、ツグミ、マヒワなどと共に、クマガラやフクロウなども見られるかもしれません。

集合=午前9時 大沢口駐車場入口

交通=夕鉄バス(文京台線)新札幌バスターミナル発「文京台西行き」大沢公園下車 徒歩5分

【円山公園】 2003年3月2日(日)

陽ざしに春が感じられる季節です。ツグミ、アトリ、マヒワ、ウソなどの冬鳥と共にキツキ類やカラ類が見られるでしょう。

集合=午前9時 円山公園管理事務所前 午前中解散

交通=地下鉄東西線 円山公園駅下車 徒歩3分

【ウトナイ湖】 2003年3月24日(日)

本州などで冬を過ごしたガン・カモ類が、この時期群れをなして、北の繁殖地を目指して渡りをはじめます。ウトナイ湖は、これらの渡りの中継地となっています。ヒシクイ、マガン、オオハクチョウやカモ類と共にオオワシやオジロワシも観察されます。

集合=午前9時30分 ウトナイ湖畔駐車場湖畔側

交通=道南バス(苫小牧行き)新千歳空港発~ウトナイ

湖畔駐車場下車 徒歩2分

☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具をお持ちください。

☆何れの探鳥会も余程の悪天候でない限り行きます。

☆探鳥会の問い合わせは

011-563-5158 白澤さん宅へ

鳥民だより

◇新年講演会のご案内

・日時:平成15年1月11日(土) 13:30~16:00

・場所:札幌市女性センター

札幌市中央区大通西19丁目

・講師:川崎 慎二氏

平成2年3月に日本動物植物専門学院金沢校卒業後、石川県白山自然保護センターで半年間、展示解説等の業務に従事し、その後加賀市鴨池観察館でアシスタントレンジャーを勤められました。平成3年4月から日本野鳥の会レンジャーとして、東京港野鳥公園、根室市春国岱ネイチャーセンターを経て、平成14年4月にウトナイ湖サンクチュアリ・レンジャーになられ、現在、ウトナイ湖野生鳥獣保護センター運営担当として勤務されています。

・演題:「根室地方の自然と野鳥」

根室市春国岱ネイチャーセンターのレンジャーとして勤務した8年間に会った、根室地方の野鳥と、それらを育む独特の自然環境について、多数のスライドをまじえてお話をさせていただく予定です。

・スライド映写

皆さんの持ち寄ったスライドを映写します。たくさん作品の参加をお待ちしています。

・会費:500円

◇写真展の作品を募集します

平成15年度も野鳥写真展を開催します。場所は光映堂フォトギャラリー(札幌市中央区大通西3丁目)で、5月の予定です。詳細は次号でお知らせします。

◇会費納入のお願い

平成14年度会費を未納の方は、できるだけお早めに納入してください。愛護会の健全運営は会費の順調な納入にかかっています。

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>